埋蔵文化財緊急調査事業に係る

埋蔵文化財調査報告

平成９年度増山城跡総合調査概報

増山城跡 Ⅰ

１９９８年３月

砺波市教育委員会

序　文

富山県の西部に位置する砺波平野の水田化の歴史は古く、すでに８世紀半ばの「東大寺領庄園絵図」には砺波郡４庄の開田絵図が残っています。その後も先人の営々とした努力により、現在では北陸地方でも有数な穀倉地方となっています。増山城はこの砺波平野の東部、射水郡と隣接する丘陵部に位置し、砺波地方の歴史と深く関わりを持っています。その歴史は南北朝時代から近世の初めに至る約250年に及び、17世紀初頭の時点で廃城になっています。

現在増山城跡は、「越中三大山城」のひとつとして県内有数の規模を誇るものとして知られています。この時代の山城跡で、往時の状態が良好な形で広範囲に保存されていることから、城跡の一部が昭和40年に富山県指定史跡になり、城下町跡の土塁は昭和56年に砺波市指定史跡となりました。

増山城跡に関する本格的な調査は、昭和60年代前半に実施されましたが、埋蔵文化財調査が実施しえなかった点などに課題が残っていました。そのため、城跡の構造解明を目的とした増山城跡総合調査事業を国や富山県の補助を受け平成９年度から４カ年計画で実施することとしました。

今年度については、城跡南部のいわゆる「無常」周辺の発掘調査と測量調査を実施し、その成果を概報として作成しました。この小冊子は、まだまだ内容としては不十分ですが、発掘調査と測量調査によって得られた資料を紹介したもので、先人の残した文化財を理解・伝承するとともに、地域の歴史と文化の活用にいくばくかのお役に立てば幸いです。

おわりに、調査の実施に多大なご協力をいただきました宇野隆夫富山大学人文学部教授、西井龍儀氏、高岡徹氏をはじめ増山城跡総合調査委員会委員、関係機関、地元の方々に厚く御礼申しあげます。

平成10年３月

砺波市教育委員会

教育長　飯　田　敏　雄

例　言

1　本書は、富山県砺波市増山地内に所在する増山城跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2　事業は、緊急発掘調査事業によって実施した。

3　調査期間・面積は次のとおりである。

測量調査期間	平成９年９月30日～平成10年３月27日
測量調査面積	約50,000㎡
発掘調査期間	平成９年10月19日～平成９年12月６日(実働31日)
発掘調査対象面積	約1,600㎡
発掘面積	約96㎡

4　調査体制は以下のとおりである。

増山城跡総合調査委員会	富山大学人文学部教授			宇野隆夫
	日本考古学協会会員			西井龍儀
	富山県埋蔵文化財センター		所　長	岸本雅敏
	富山県教育委員会文化課		課　長	棚瀬佳明
	富山大学人文学部助教授			前川　要
	富山県文化財保護審議会		会　長	佐伯安一
	城郭研究家			高岡　徹
	栴檀野地区増山自治振興会			土田昌春
	砺波市教育委員会		教育長	飯田敏雄
	砺波郷土資料館		館　長	新藤正夫
調査担当者	砺波市教育委員会	生涯学習課	学芸員	利波匡裕
調査事務局	砺波市教育委員会		教育次長	野村泰則
	同	生涯学習課	課　長	台蔵與信
	同	生涯学習課	係　長	川原国昭

なお、現地の清掃・作業員については、増山地区自治会・砺波市シルバー人材センターより協力を得た。

5　資料の整理、本書の編集と執筆は、宇野、西井、高岡の指導を受け、利波が行なった。

6　調査期間中および資料整理期間中、次の方々から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

安念幹倫、関　清、高梨清志、宮田進一

7　調査において次の地権者の方々に御理解・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

小島将之、斎藤鉄治、高島権之助、土田昌春、信田庄一、宮野庄作、若森すみを

8　本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。

方位は真北、水平水準は海抜高である。

9　出土品および記録資料は砺波市教育委員会で保管している。

10　発掘調査・整理参加者は次のとおりである。

新藤正夫、安ヵ川恵子、高木美奈子、野手雅子(以上砺波郷土資料館)、荒木久平、山崎信雄、名越賢二、高島昭、高島一子、安ヵ川礼子、田川あや子、北林みち子(以上砺波市シルバー人材センター)、荒木慎也、真井田宏彰、砂田普司、渡辺樹、貫井美鈴、遠野いずみ(以上富山大学考古学研究室)

目　次

序　文

例　言

目　次

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境……1

1.遺跡の立地と周辺の遺跡……1

2.増山城跡の概要……1

Ⅱ　調査に至る経緯……3

Ⅲ　調査の経過と方法……5

1.調査の経過……5

2.座標軸の設定……5

Ⅳ　調査の概要……7

1.概況……7

2.遺構……7

3.遺物……9

Ⅴ　まとめ……14

平成9年度増山城跡総合調査について……14

参考文献……15

写真図版……20

図表

第1図　周辺の遺跡分布図

第2図　平成9年度調査範囲図

第3図　トレンチ位置図

第4図　階段状遺構平面・断面図

第5図　平面・断面図(トレンチ1・7・8、P1～4・7)

第6図　平面・断面図(トレンチ3・4)

第7図　断面・平面図(トレンチ2・5・6)

第8図　遺物実測図

第9図　無常東下郭断面図

第10図　空堀断面図

第11図　増山城跡南部縄張り図

第12図　増山城跡南部地形図

第1表　周辺の遺跡一覧

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境

1.遺跡の立地と周辺の遺跡

増山城跡は砺波市の東部、婦中町との境に近い庄東山地の丘陵上に位置する。芹谷野段丘と庄東山地の間には和田川が複雑に蛇行し、地質基盤である青井谷泥岩層を抉り込み、深い谷を形成している。その谷をせき止めて和田川ダムが築かれ、ダムの東側、急崖の上に増山城跡が立地しているのである。

周辺には旧石器時代から近世に至るまで、多くの遺跡の存在が知られている。特に城跡の近隣には、増山団子地窯跡をはじめ増山外貝喰山窯跡、小丸山１・２号窯跡、増山赤坂窯跡、増山笹山窯跡、正権寺後島窯跡など、古代の須恵器窯跡が多数確認されており、芹谷野段丘沿いに比定されている井山、伊加流伎、石粟の各荘との関連も考えられる。増山城跡と対峙して和田川を挟んだ段丘上には増山遺跡が存在する。昭和52年、圃場整備事業に関連して発掘調査が行われ、縄文・古代・中世末～近世初頭の遺物・遺構が検出された。この発掘調査結果とこれまでの文献資料により、当地が増山城跡の城下町であることが推定されている。

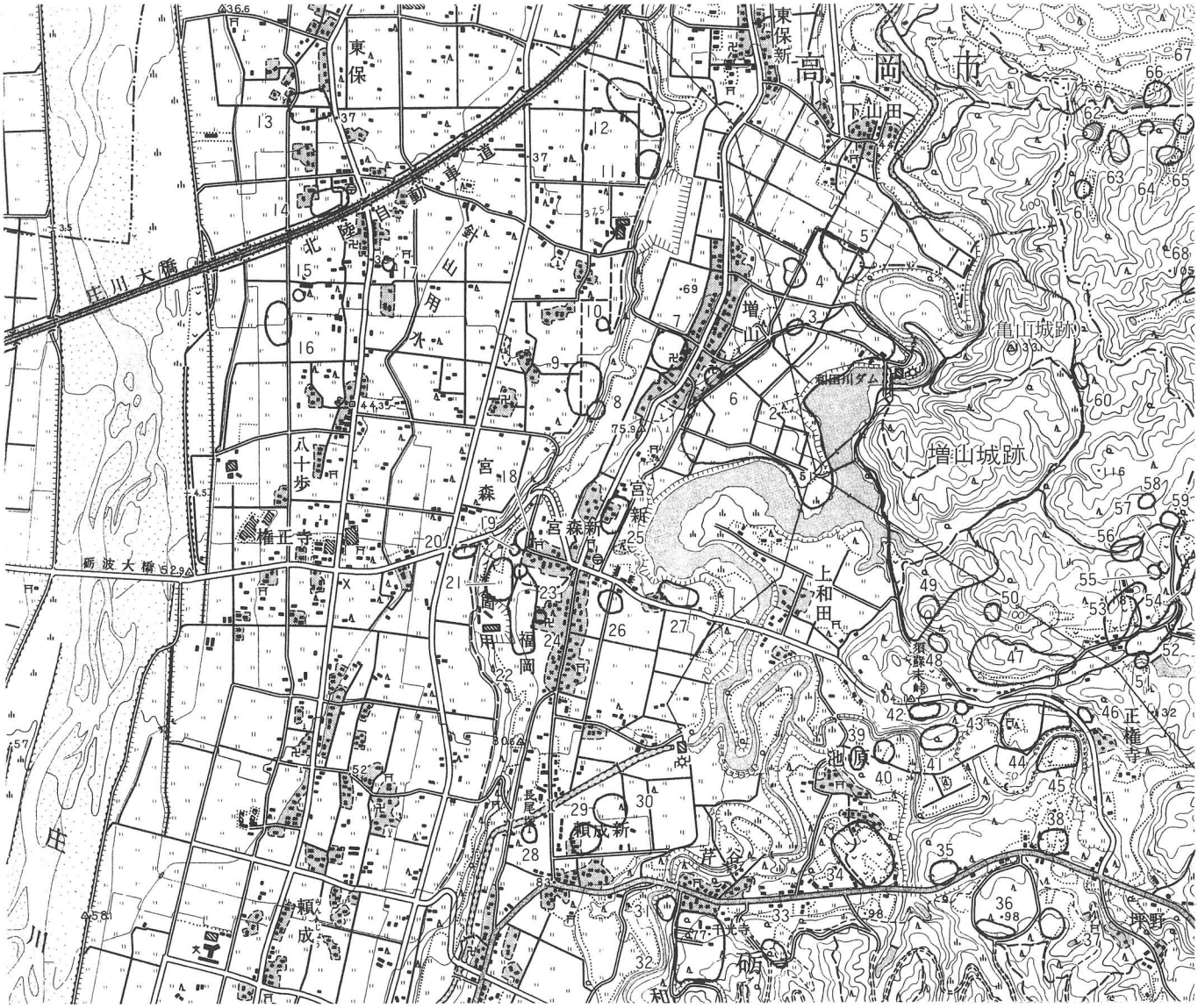
2.増山城跡の概要

増山城跡は、砺波地方の歴史と深い関わりを有した城として知られ、その歴史は南北朝から近世の初めに至る約250年にも及ぶ。

南北朝期の史料『二宮次郎左衛門入道円阿申軍忠事』には「和田城」の名称がみられ、当時から増山付近にあった和田城が桃井方の軍事拠点として存在したこと、二宮氏のその後の警固が砺波地方における要衝であることを示している。ただし、文献中の「和田城」がそのまま現在の増山城とみなすことは困難である。増山城の北東には「亀山城」と呼ばれる別の山城跡があり、こちらの方が南北朝期の「和田城」であった可能性が高い。

戦国期には神保氏の主要な居城の一つであった。神保氏は、室町・戦国時代に越中守護畠山氏の守護代として、婦負・射水の二郡を中心に大きな勢力を有した。神保氏が初めて増山城を拠点とした時期は明らかではないが、守護代としての神保氏の史料上の初見が嘉吉３年(1433)であることから、15世紀後半頃とする説がある。

16世紀前半には越後長尾氏が越中に度々出兵し、神保氏は一時衰退した。しかし神保氏の再興を進める神保長職は、従来の勢力圏であった射水・婦負二郡を固めるとともに、天文12年(1543)には新川郡に進出し、富山に築城する。この後、富山を本城として各地に築城するが、増山城は特に西方の砺波郡に向けて設けられた支城として位置づけられる。新川郡への神保氏の隆盛は長尾景虎(上杉謙信)の出兵を促し、永禄３年(1560)には富山城が攻められた。長職は増山城へ撤退したが、謙信の増山攻めの際に城を落ちのびた。一旦失地を回復したが、再度謙信に攻められ降伏した。後に長



第Ⅰ図　周辺の遺跡分布図（S＝1/25000）

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	増山城跡	山城	中世	35	頼成A遺跡	散布地	縄文
2	増山遺跡	散布地・集落	縄・古・中・近	36	頼成C遺跡	散布地	縄文
3	増山亀田窯跡	窯	奈良	37	頼成D遺跡	散布地	旧石器？
4	高沢島Ⅲ遺跡	散布地・集落	古代	38	頼成B遺跡	散布地	縄文・平安・中世
5	高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡	散布地・集落	旧石・縄・古・近	39	狐塚	塚	中世？
6	増山妙覚寺坂窯跡	窯	奈良	40	狐塚遺跡	散布地	鎌倉
7	増山西遺跡	散布地	古代？	41	須蘇末峠遺跡	製鉄	古代
8	宮森窯跡	窯	奈良	42	須蘇末峠A遺跡	散布地	旧石・弥生・古代
9	宮森廃寺	寺院	鎌倉・室町	43	池原向島遺跡	製鉄	古代
10	行者塚	塚	中世？	44	正権寺遺跡	散布地	平安
11	東保石坂南遺跡	散布地	古代	45	正権寺南遺跡	散布地	平安
12	東保石坂遺跡	散布地	縄文・奈良・鎌倉	46	正権寺前山遺跡	散布地	中世？
13	館の土居跡	城館	中世	47	金クソ山遺跡	製鉄	古代
14	東保高池遺跡	散布地	平安・鎌倉	48	金クソ山西遺跡	製鉄	古代
15	東保般若堂遺跡	寺院？	中世	49	増山団子地窯跡	窯	奈良
16	高坪遺跡	散布地	平安・鎌倉・室町	50	増山赤坂窯跡	窯	平安
17	東保高池南遺跡	散布地	古代？	51	正権寺後島窯跡	窯	平安
18	宮森新北島Ⅰ遺跡	集落	縄文	52	正権寺後島遺跡	散布地・製鉄	平安
19	光明真言塚	経塚？	中世？	53	増山十村山遺跡	散布地・製鉄	縄文・古代
20	宮森遺跡	散布地	縄文	54	小丸山窯跡群	窯	平安
21	大谷島遺跡	散布地	縄文・奈良・平安	55	増山外貝喰山窯跡	窯	奈良・平安
22	厳照寺遺跡	集落	縄文	56	増山焼山遺跡	製鉄	古代
23	宮森新経塚	経塚	中世？	57	増山外貝喰山遺跡	散布地	旧石器
24	厳照寺境内内遺跡	墓？	鎌倉	58	増山笹山窯跡	窯・製鉄	平安
25	宮新遺跡	散布地	奈良	59	増山外法蓮山窯跡	窯	平安
26	宮森新天池遺跡	散布地	縄文	60	増山雀坂山遺跡	製鉄	古代？
27	上和田遺跡	散布地	縄文	61	西谷No.9遺跡	炭窯？	古代？
28	長尾為景塚	塚	中世？	62	西谷No.7遺跡	炭窯？	古代？
29	長尾能景塚	塚	中世？	63	西谷No.8遺跡	炭窯？	古代？
30	頼成新遺跡	散布地	縄文	64	西谷No.5遺跡	炭窯？	古代？
31	芹谷下大門遺跡	散布地	中世・近世	65	西谷No.6遺跡	炭窯？	古代？
32	千光寺遺跡	寺院	中世	66	西谷No.4遺跡	炭窯？	古代？
33	芹谷遺跡	散布地	旧石・縄文・古代	67	西谷窯跡	窯	平安
34	池原遺跡	散布地・製鉄	旧石・縄文・古代	68	西谷No.10遺跡	炭窯？	古代？

第Ⅰ表　周辺の遺跡一覧

職は本拠を増山城に移し、上杉氏に属して一向宗徒を攻めている。元亀３年(1572)には加賀の一向一揆が越中へ入った。富山城を占拠し上杉方と対峙したが、当時増山城には一揆方(反上杉方)に立つ勢力が拠っていたとみられる。一揆方は天正元年(1573)頃には富山付近から駆逐されたとみられ、同４年(1576) ８～９月頃には謙信は増山城を攻略している。謙信は越中の制圧を達成し、この後増山城は上杉氏の越中西部における拠点になったとみられる。

上杉氏が増山城を支城としていたのは天正４～９年にかけての期間であったとみられるが、謙信が天正６年(1578) ３月に急死すると、織田方が越中に進出し同８年頃までには国内の西半部をほぼ制圧するに至った。しかし、各所には依然として上杉方の、またはそれに通じる勢力の支配拠点が存在した。増山城や木舟城(現福岡町)なども同９年半ば頃までには、織田方によって制圧されたとみられ、以降は織田(佐々)方の拠点となる。

佐々成政は天正11年(1583)夏頃までに、越中国内の統一を達成する。翌12年の小牧・長久手の戦いにおいては秀吉方と敵対し、加賀・能登の前田氏と戦いを交えた。この時増山城は、越中西部国境付近の戦いにおいて重要性が高かった。天正13年(1585) ８月までは成政が増山城を守っていたが、成政が秀吉に降った後は前田氏の支城となり、山崎庄兵衛(長徳)、中川清六(光重)が城を守った。

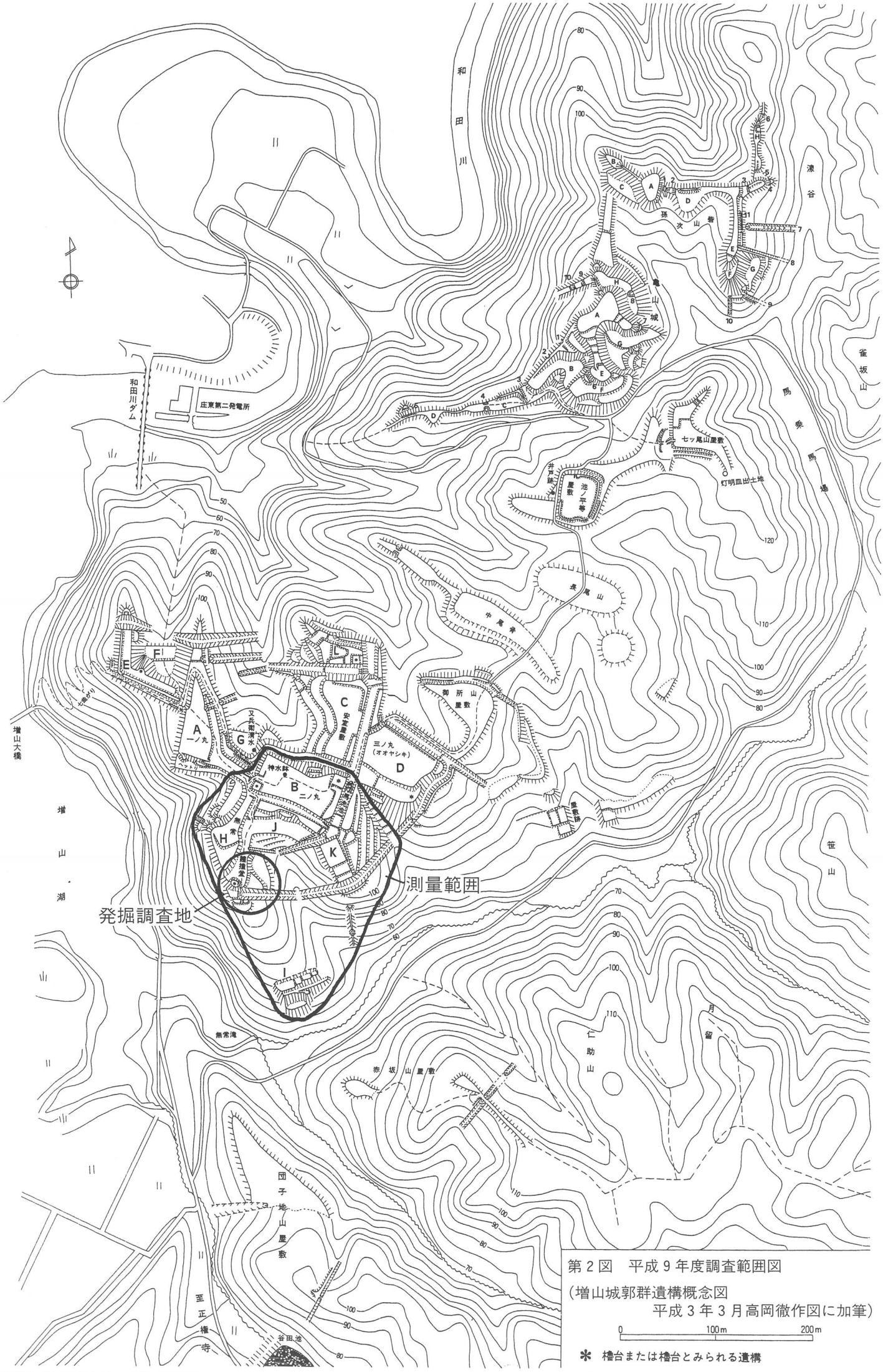
増山城の存続時期については、明確な史料は残されていない。少なくとも中川氏時代の実質的な管理者であった簫姫の没した慶長８年(1603)か、光重自身が退老した同16年(1611)頃までは存続したと考えられる。また同19年(1614)には、光重が増山城にて没したとしているが明らかではない。いずれにしても17世紀初頭の慶長年間の時点で廃城になったと考えられる。

II　調査に至る経緯

増山城跡の本格的な調査については、高岡徹氏、西井龍儀氏を中心として砺波郷土資料館が昭和62年から約３年にわたって実施している。この調査では、城郭・文献・考古の三分野の研究者による調査グループが結成され作業が進められた。調査の結果、増山城自体の縄張りが初年度にほぼ判明し、二重の空堀や櫓台、長大な竪堀、郭跡など数々の成果があげられた。その成果をふまえ、昭和63年11月には増山城跡を中心として「北陸地方中世城館セミナー」が開催された。

これまでの調査において、増山城跡の現地形観察が行なわれていたが、より明確に増山城跡の実態を把握するため考古学的な調査が必要であることが望まれていた。これをうけて、砺波市では平成９年度に増山城跡総合調査委員会を設立し、増山城跡の実態を解明するとともに、重要な文化遺産を周知・活用する方法を検討することとなった。

平成９年度の調査では、城跡南部を中心として発掘・測量調査を実施した。



第２図　平成９年度調査範囲図

（増山城郭群遺構概念図
平成３年３月高岡徹作図に加筆）

0　100m　200m

＊　櫓台または櫓台とみられる遺構

III　調査の経過と方法

1.調査の経過

発掘の事前に、発掘調査対象区及びその周辺の下草刈りを実施した。調査対象地は散策路から、150m程度森林へ入った地点であり、そこまでの通路を確保する意味もあった。また、かなりの厚さで枯れ木や落ち葉が堆積していたので、下草刈りに並行して堆積物の除去作業も行い、地形の変化が分かり易いように努めた。

その後、幅約2mでトレンチを設定し、最終的には計8ヶ所の掘削を行った。トレンチの設定については、平坦面や堀・櫓台に直交するとともに、断面図にて各所のエレベーションを確認できるように設定した。掘削は地山面までを基準としたが、層位関係で地山面まで到達していないトレンチも存在する。重機が入れない場所であったため、人力にて掘削を行った。また、立木の伐採は基本的に行わないこととし、トレンチ内においても立木を残している部分がある。

調査にあたり、平成9年度より増山城跡総合調査委員会を組織し、調査方法・調査地点などについて検討する機関とした。委員構成は、学識経験者・関係行政機関の代表者・地元住民の代表者からなる。委員の召集は調査前・中・後の3回実施した。調査前には今年度の調査対象区の選定と具体的な調査方法を検討し、調査期間中には現地にて遺構・遺物の検出状況を確認しつつその時点での発掘の成果や今後の調査について検討を行った。調査後には、今年度の調査結果の報告及び今後の調査について確認した。

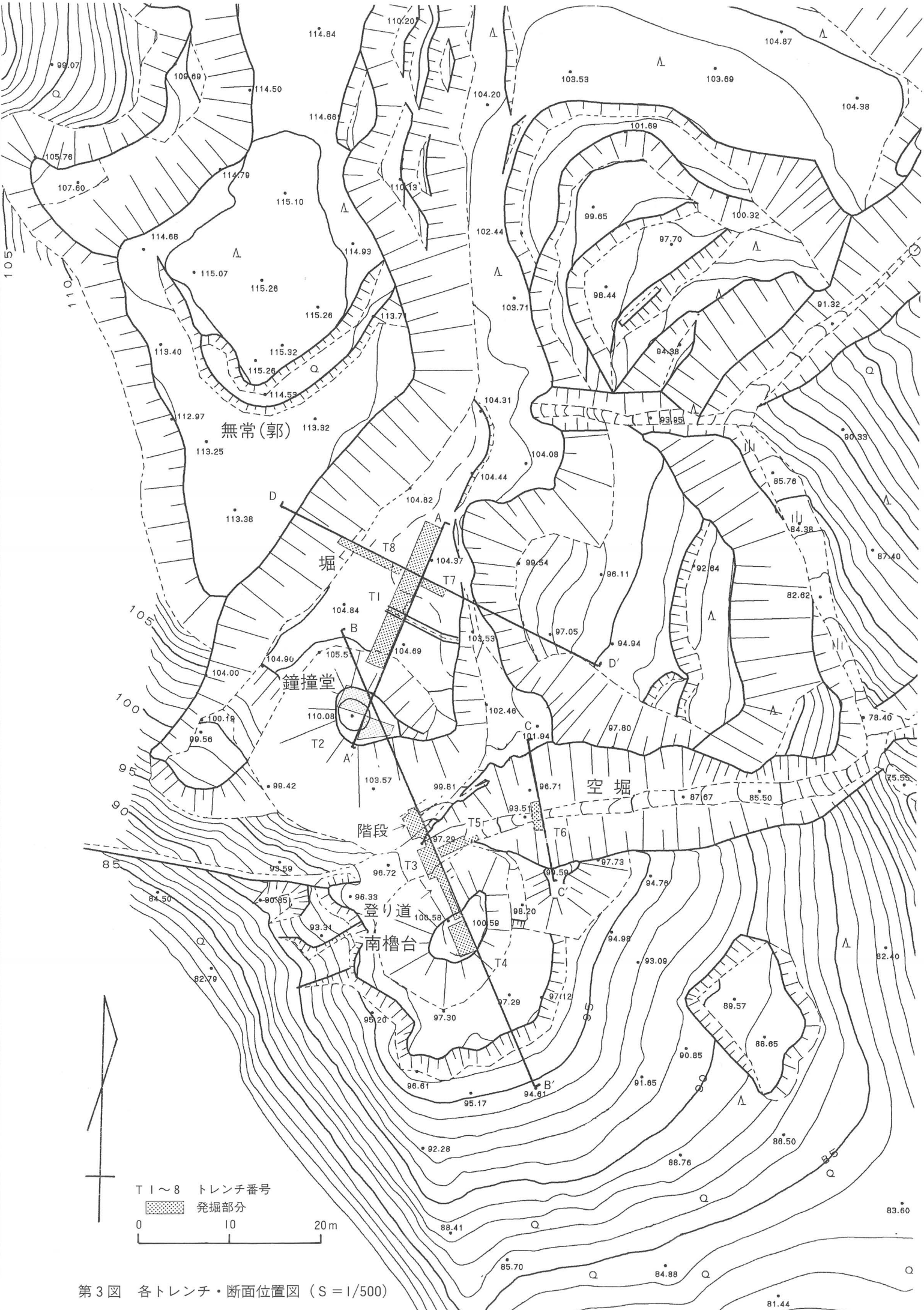
調査終了の後、地元住民を対象として現地説明会を開催した。天候不順な中、約60名の見学者が訪れ盛況をみせた。

埋め戻しは人力にて行った。斜面では崩落を防ぐため、土のう袋を積み上げることによって斜面を復元した。

2.座標軸の設定

座標軸は次年度以降の調査もふまえて、増山城跡から亀山城、孫次山砦などを視野に入れ、国土地理院設定第Ⅶ座標系のうちX＝72.5km、Y＝－11.5kmの点を0原点として設定した。南北軸をX軸とし、X＝0から北方向へX座標の数値が増える。同様に東西軸はY軸とし、Y＝0から東方向へ進むにつれて、Y座標の数値が増える。1グリッドの区画は10×10mとし、今年度の調査区の範囲はX＝350～480、Y＝220～340となる。

今年度の測量調査対象面積は約50,000㎡、発掘調査対象面積は約1 600㎡で、発掘面積は約96㎡である。



第3図　各トレンチ・断面位置図（S＝1/500）

IV　調査の概要

1.概況

調査対象地区は増山城跡の南側、城下町・和田川を望む標高約93m～約110mの山地中に所在する。一帯の現況は、杉や雑木などの森林となっており、杉は戦後植林されている。地元の方によれば、増山城跡の平坦面は、戦後までは畑として利用されていたそうである。

現地の名称については、天保15年(1844年)の絵図に「字無常」と記されている無常を基本として、無常東下郭、鐘撞堂、空堀、南櫓台と呼称する。

2.遺構

(1)無常東下郭

無常東下郭は長軸約32m、最大幅約20mで面積は約320㎡を測る。標高は約104m～約105mである。無常からの斜面下端には無常東下郭に沿って堀が存在し、最大幅約2.8m、地表面からの最深部は約2.3mで全長及び堀の存在状況は不明である。この調査区は、断面観察から斜面を削平しその排土を下方へ盛ることによって造成されたと考えられる。また堀は平坦面の造成時や埋土などの理由により数回付け替えられたと思われる。発掘区の中央部では、ほぼ南北方向に壁面へと続く長さ約2.5mの石列が確認されている。石の直径は5㎝～10㎝程度である。石列以東の面は硬く、周辺より約0.1m高いことから建物基壇として使用されていた可能性がある。鐘撞堂裾部には下端と並行して幅約0.3mの溝状の痕跡がある。

(2)鐘撞堂

通称鐘撞堂と呼称される櫓台は標高約105m～約110mのレベルにあり、上部平坦面は長軸約7m、短軸約6mで面積は約40㎡である。平坦面は標高109.400m～110.140mで、南東下がりであるがほぼ水平に造成されている。無常東下郭とは約5mの比高差がある。無常と地続きだったのを空堀で切り離し、東側中腹に平坦面を造成(無常東下郭)し、鐘撞堂を造りだしたと考えられる。柱穴など建物の痕跡は確認されなかった。

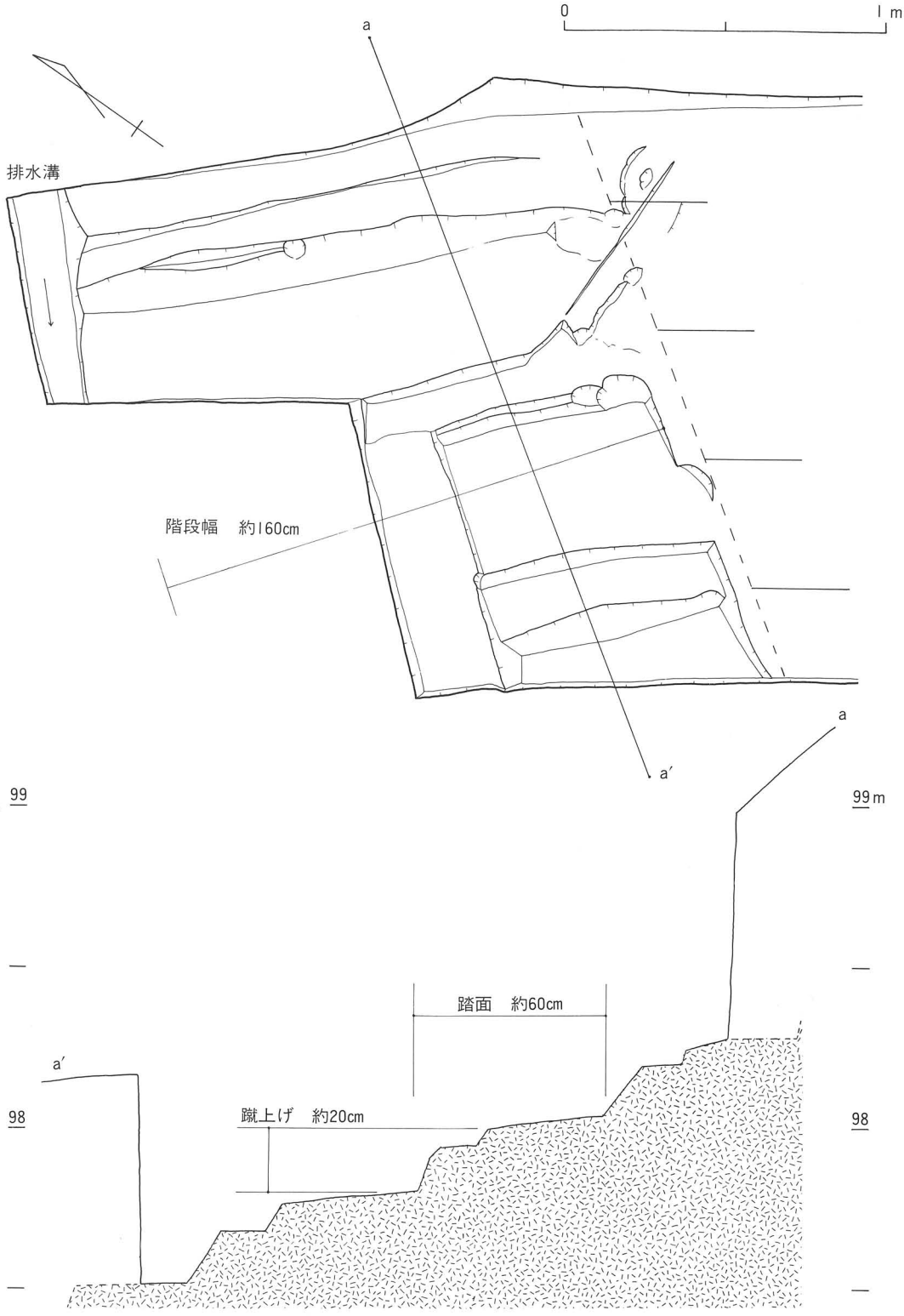
(3)空堀

調査区の南部において郭群の最も外側をめぐる空堀は、鐘撞堂の南側直下を起点として東へ伸び途中に東北へ方向を変え、その間に三つの尾根と二つの谷にまたがって三の丸北側の空堀と合流する。空堀の最大幅は約13mで、堀底の全長は約311mにもなる。

3トレンチを設定した空堀の鐘撞堂南側では、地表面より約1.8mで青井谷泥岩層を掘り込んだ底

部が現れる。底部の標高は95.320m～95.400mで、鐘撞堂平坦面との比高差は約15mである。底幅は約2.5mで、平坦面が存在する。空堀の斜面角度は約50°～60°を測る。断面観察からこの場所は短期間で埋められたと考えられる。標高96.520m～96.620mでは硬化した面が存在しその上に薄い腐蝕土層が確認されることから、埋めた後に平坦面を使用した痕跡と思われる。無常東下郭と南櫓台の連絡路としての土橋は未検出である。

空堀の鐘撞堂側斜面には排水溝を伴う階段状遺構が存在し、調査区内では標高97.516m～98.320mにおいて4段確認されている。1段の段築は小面と大面を造るようにカットされており、一見2



第4図　階段状遺構平面・断面図（S＝1/20）

段の様相を呈している。幅は約1.6m、踏面約0.6m、蹴上げは約0.2mである。階段面の直上は約0.1m程度硬く土が締まっていたが、階段上に崩落した土を踏みしめ、その上を歩いていたことが要因であろう。この階段状遺構は、空堀と無常東下郭を連絡するために利用されていたと考えられる。

南櫓台側斜面には、標高98.150m～98.500mにおいて西から東へ緩い傾斜をもつ、最大幅約0.6mの平面が確認された。恐らくは空堀と南櫓台の平坦面を結ぶ道として機能していたであろう。

6トレンチにおける空堀調査区では、地表面下約1.2mで底部を確認した。標高は92.25m。底幅は約0.7mあり、青井谷泥岩層を掘り込んで造成している。最下層は崩落礫を多量に含み締まりが強い。その上層には標高約92.4m～約92.55mにおいて拳大から人頭大の大きさの礫が確認される。

(4)南櫓台

南櫓台は調査区の南端に所在する。標高約97.3m～約100.6mの高さがあり、上部平坦面は東西約9m、南北約5mで面積は約40㎡である。平坦面の標高は100.340m～100.620mを測る。断面観察により、平坦面は盛土によって造成されたと考えられる。平坦面では、遺物及び遺構は検出されていないが、標高100.329m～100.428mにおいて炭化物が面的に確認されている。また、3トレンチの断面観察から標高役100m付近において、径約10～15cm程度の礫が集中して確認されている。その礫群の直上には穴と思われる掘り込みが存在する。これは、南櫓台の平坦面をめぐるような遺構の可能性もある。

3.遺物（第8図）

今回の調査区からは土師器、越中瀬戸、瀬戸美濃、京焼風肥前系、越前、白磁、砥石などの遺物が確認された。

土師器(1～5)

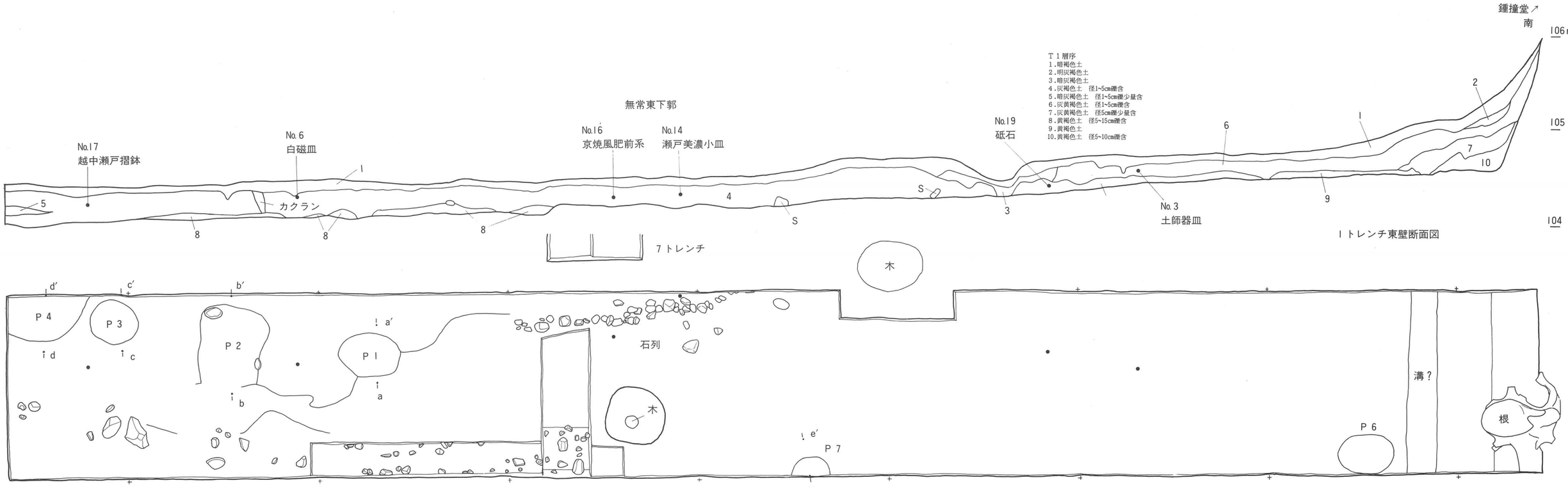
いずれも中世土師器の皿である。1は黄燈色を呈し、焼成は不良。2はやや端部に厚みをもつ。3は内面から端部にかけて横ナデし、胴部は指で押さえている。4は端部を横ナデし、口縁がふぞろいである。焼成不良で成形は雑である。口径は約14cm、器高は約2.5cm。5は底部のみで口径は不明。時期は1・3が16世紀後半、4は16世紀前半。2・3・5は1トレンチより、1・4は8トレンチから出土している。

瀬戸美濃(7・8・10・12・14)

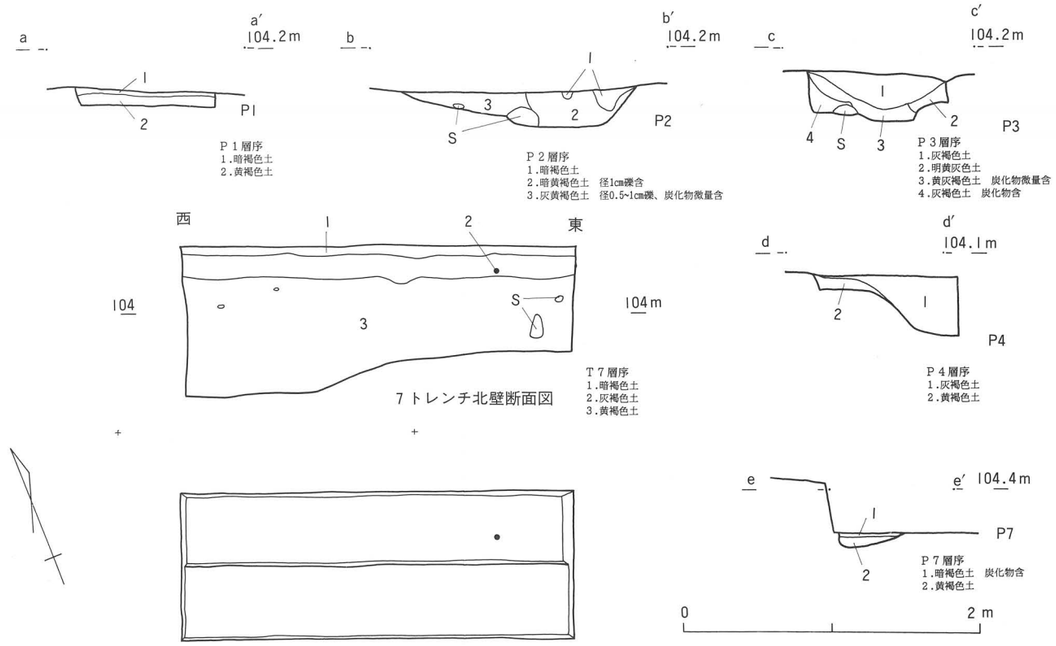
7・8・10は口縁部だが、小片のため器形は不明。10は灰釉を施す。時期は10が16世紀代。いずれも1トレンチより出土。12は16世紀前半の皿と思われ、8トレンチより出土している。14は褐釉が施される稜皿で、口径約10cm、器高は約2.2cmである。16世紀中頃のもので、1トレンチより出土。

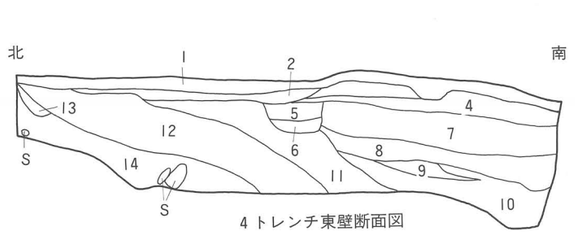
京焼風肥前系(13・16)

13は青緑釉。16は口径約10cmを測る淡黄白色釉の碗である。17世紀後半から18世紀にかけての土



第５図　平面・断面図（１・７・８トレンチ、Ｐ１～４・７）（Ｓ＝1/40）

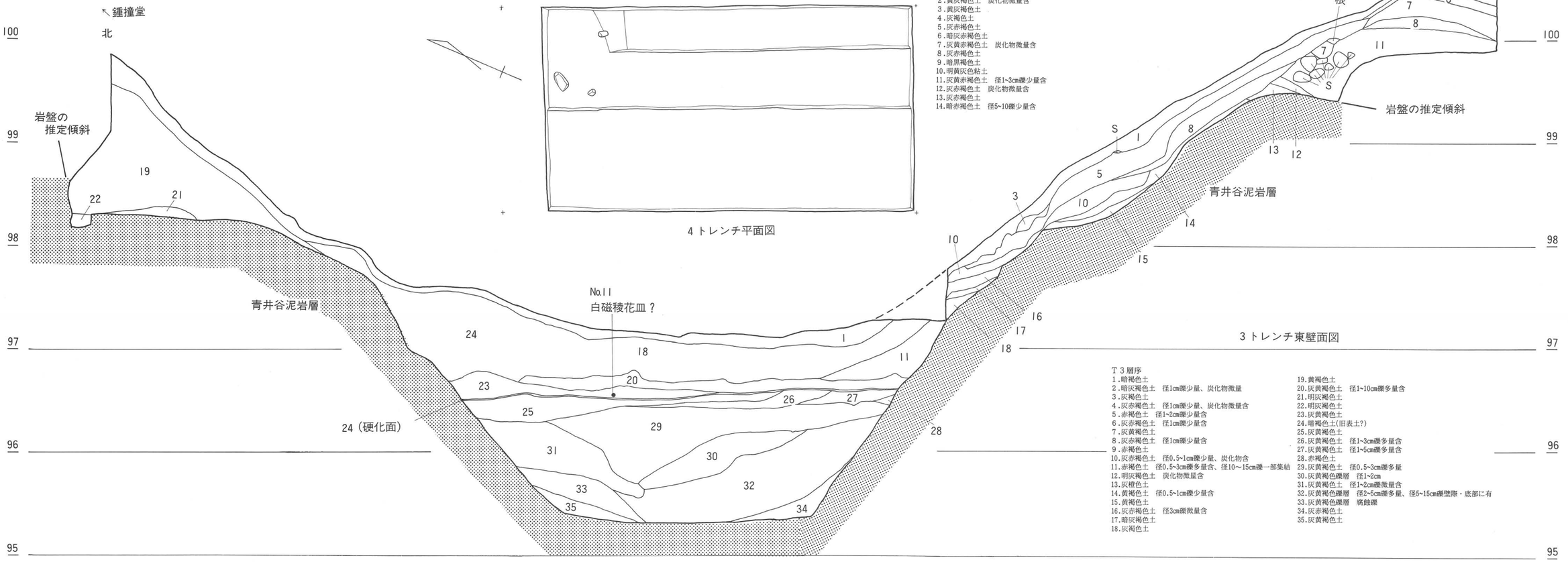




4トレンチ東壁断面図

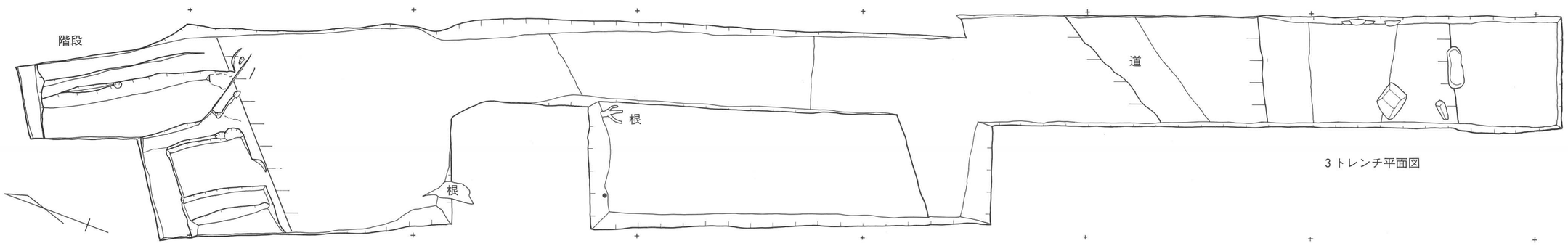
4トレンチ平面図

T4層序
1.暗褐色土
2.黄灰褐色土　炭化物微量含
3.黄灰褐色土
4.灰褐色土
5.灰赤褐色土
6.暗灰赤褐色土
7.灰黄赤褐色土　炭化物微量含
8.灰赤褐色土
9.暗黒褐色土
10.明黄灰色粘土
11.灰黄赤褐色土　径1~3cm礫少量含
12.灰赤褐色土　炭化物微量含
13.灰赤褐色土
14.暗赤褐色土　径5~10礫少量含



3トレンチ東壁面図

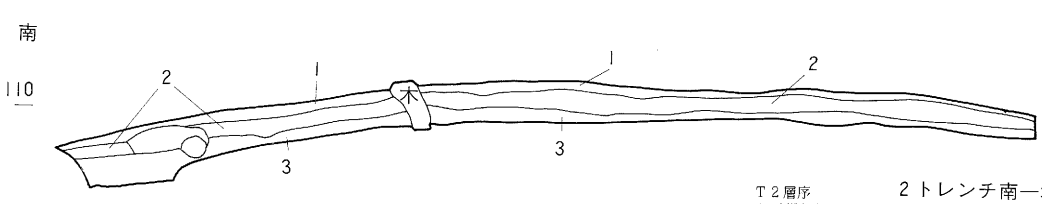
T3層序
1.暗褐色土
2.暗灰褐色土　径1cm礫少量、炭化物微量
3.灰褐色土
4.灰赤褐色土　径1cm礫少量、炭化物微量含
5.赤褐色土　径1~2cm礫少量含
6.灰赤褐色土　径1cm礫少量含
7.灰黄褐色土
8.灰赤褐色土　径1cm礫少量含
9.赤褐色土
10.灰赤褐色土　径0.5~1cm礫少量、炭化物含
11.赤褐色土　径0.5~3cm礫多量含、径10～15cm礫一部集結
12.明灰褐色土　炭化物微量含
13.灰橙色土
14.黄褐色土　径0.5~1cm礫少量含
15.黄褐色土
16.灰赤褐色土　径3cm礫微量含
17.暗灰褐色土
18.灰褐色土
19.黄褐色土
20.灰黄褐色土　径1~10cm礫多量含
21.明灰褐色土
22.明灰褐色土
23.灰黄褐色土
24.暗褐色土(旧表土?)
25.灰黄褐色土
26.灰黄褐色土　径1~3cm礫多量含
27.灰黄褐色土　径1~5cm礫多量含
28.赤褐色土
29.灰黄褐色土　径0.5~3cm礫多量
30.灰黄褐色礫層　径1~2cm
31.灰黄褐色土　径1~2cm礫微量含
32.灰黄褐色礫層　径2~5cm礫多量、径5~15cm礫壁際・底部に有
33.灰黄褐色礫層　腐蝕礫
34.灰赤褐色土
35.灰黄褐色土



3トレンチ平面図

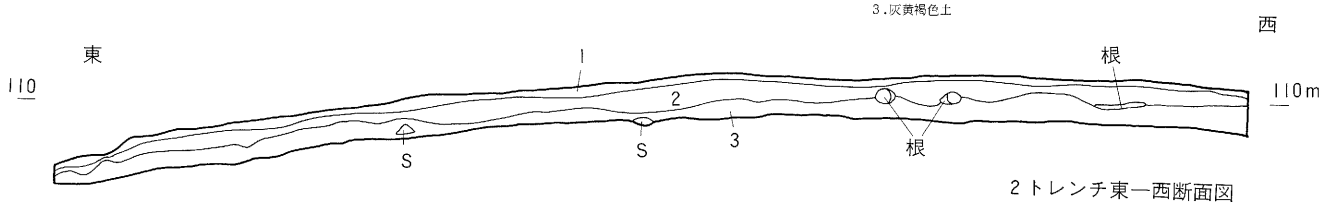
第6図　平面・断面図（3・4トレンチ）

0　2 m

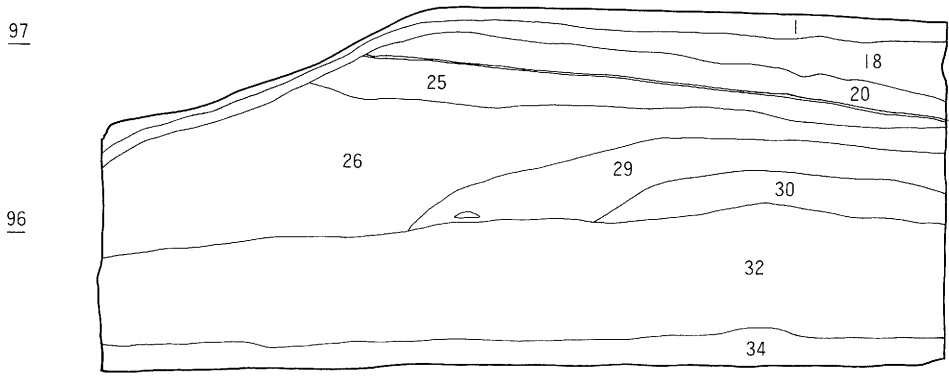


T２層序
1.暗褐色土
2.灰褐色土
3.灰黄褐色土

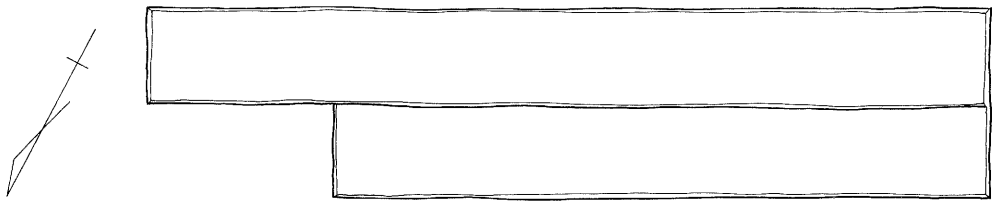
２トレンチ南―北断面図



２トレンチ東―西断面図

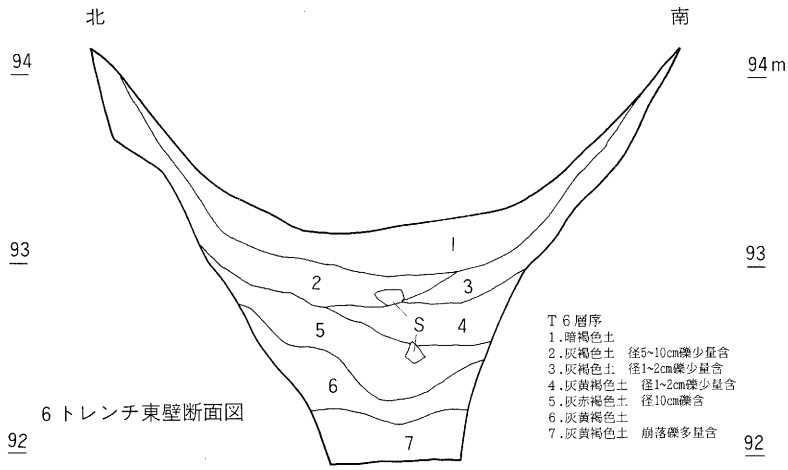


５トレンチ南壁断面図



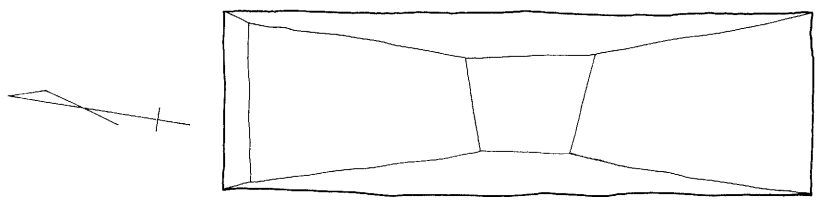
５トレンチ平面図

T５層序
1.暗褐色土
18.灰褐色土
20.灰黄褐色土　径1~10cm礫多量含
24.暗褐色土(旧表土?)
25.灰黄褐色土
26.灰黄褐色土　径1~3cm礫多量含
29.灰黄褐色土　径0.5~3cm礫多量
30.灰黄褐色礫層　径1~2cm多量含
32.灰黄褐色礫層　径2~5cm多量含
34.灰赤褐色土
＊T３の層序に準拠



T６層序
1.暗褐色土
2.灰褐色土　径5~10cm礫少量含
3.灰褐色土　径1~2cm礫少量含
4.灰黄褐色土　径1~2cm礫少量含
5.灰赤褐色土　径10cm礫含
6.灰黄褐色土
7.灰黄褐色土　崩落礫多量含

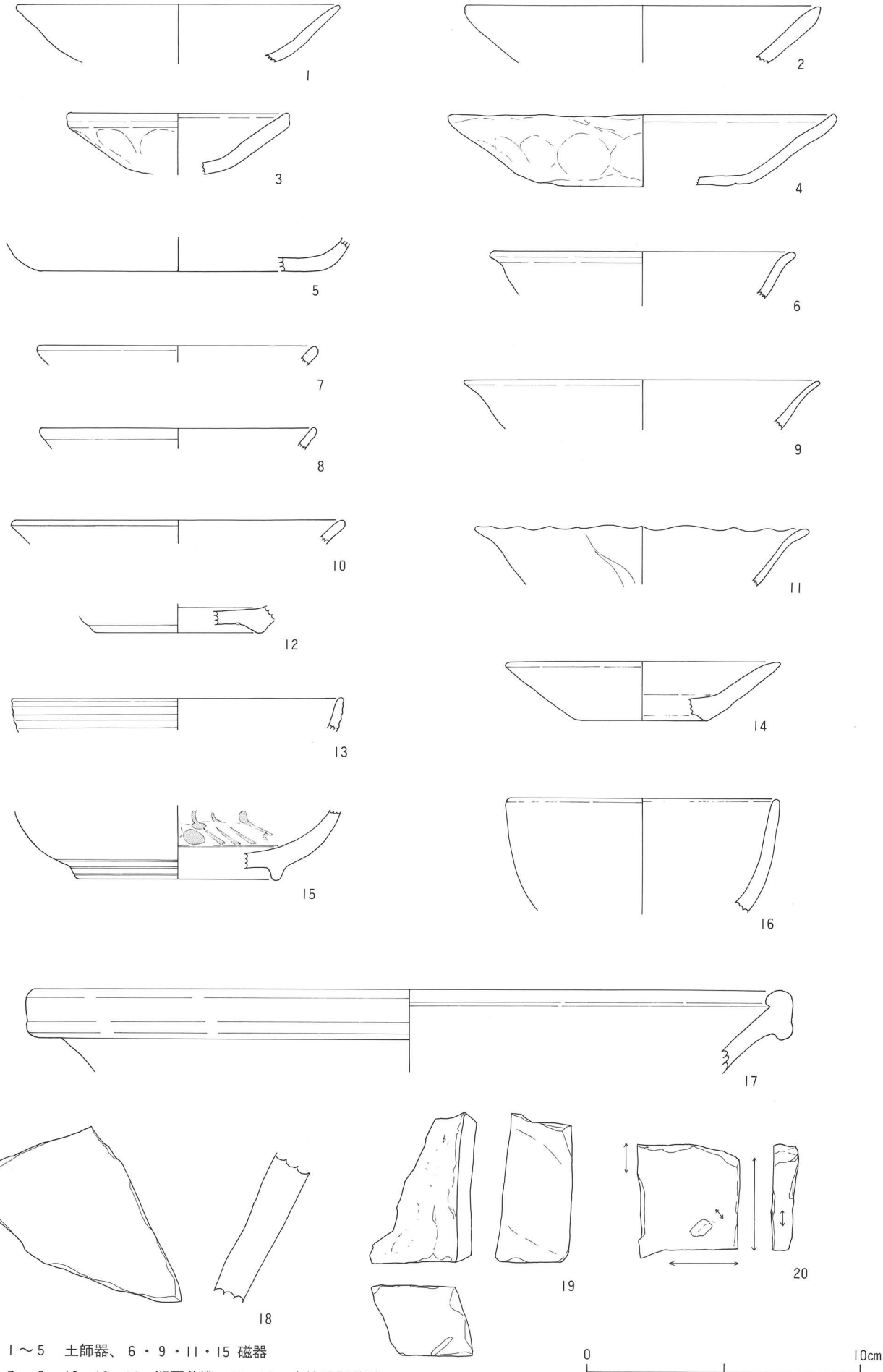
６トレンチ東壁断面図



６トレンチ平面図

0　2 m

第７図　平面・断面図（２・５・６トレンチ）



1～5　土師器、6・9・11・15 磁器
7・8・10・12・14　瀬戸美濃、13・16　京焼風肥前系、
17　越中瀬戸、18　越前、19・20　砥石

第8図　遺物実測図（S＝1/2）

器で、いずれも１トレンチより出土。

越中瀬戸(17)

口径約28cmを測る擂鉢で、口縁端部は内側へ折り返している。内外面とも鉄釉が施されている。16世紀末から17世紀初頭のもの。１トレンチより出土。

越前(18)

越前の甕で、胴部片。外面には鉄釉が施され、焼成は良好。

磁器(６・９・11・15)

６は白磁の小皿。９は灰釉(青灰釉)の皿か。11は白磁の稜花皿と思われ、内外面とも型押しで花弁を表現している。いずれも16世紀代のものと推定されるが、９は前半から中頃のものか。15は伊万里で染め付けの碗。底部のみで口径は不明。６は１トレンチ、９は５トレンチ、11は３トレンチ、15は８トレンチ排土より出土。

砥石(19・20)

19・20は砥石で、20は割れた後にも使用している。19は１トレンチ、20は７トレンチより出土。

Ⅴ　まとめ

平成９年度増山城跡総合調査について

今回の調査区では、大規模な土木工事により、最大比高差約15mの空堀をはじめ、地形を大きく改変して空堀や櫓台、平坦面を造成していることが確認された。

無常東下郭における断面観察から、３回程度の土地の造成と利用が存在したことが認められた。当地点での最深部から確認された土師器は16世紀前半と推定され、最初の造成が同時期であったと考えられる。空堀は青井谷泥岩層を掘削し造成されている。次いで、盛土ののち溝状の遺構と並行した空堀が確認される時期がある。その後、空堀を再造成し、建物跡が確認される面が作り出されるのである。これらのことから無常東下郭においては、16世紀前半には平坦面・空堀を造成し利用していたと考えられる。

鐘撞堂周辺の造成は、旧地形の無常から南櫓台へと続く尾根を掘削しさらに斜面に盛土をすることにより現在の地形に変化したと考えられる。無常と鐘撞堂の間では掘削した土を東下へ盛ることにより無常東下郭を造成し、櫓状に尾根を残すことにより鐘撞堂を造りだした。鐘撞堂と南櫓台との間では、大規模な掘削を行い、空堀を造成するとともに櫓状に残し南櫓台を形成している。鐘撞堂・南櫓台の用途については、南方の尾根伝いに無常へと侵入しようとする敵を阻止するための増山城南側の防御施設であったとみられる。南櫓台ー鐘撞堂ー無常の櫓・郭による三重の監視施設を整え、さらに空堀を挟んでいることにより、厳重な防御体制を形成しているのである。さて、鐘撞堂(カネツキドウ)という呼称からは、当地にて鐘を合図や情報伝達に用いたとする考え方もできるが、推測の域を出ない。ただし、鐘撞堂からは城下町を眼下にできるので、何らかの合図を送るこ

とは可能である。

鐘撞堂南側の空堀では堀を埋めて平坦面を造成していることが、硬化面からうかがうことができる。その造成時期については遺物から16世紀代と推定されるが明確ではない。

空堀内では、鐘撞堂側斜面に階段、南櫓台側斜面に道を検出している。階段の用途としては、空堀と城内との連絡路が考えられる。ただし、城下の現市道へ斜面を下る道が現在も存在し、階段が確認されたレベル及び方向がほぼ同じであることから、城下町へ通じる連絡路の可能性もある。南櫓台側の道が平坦にしただけのものに対して、段を設けていることからもその活用度や重要性が推測できる。階段については富山市白鳥城跡でも確認されているが、本城跡では排水溝をもつことが特徴である。

遺物は、無常東下郭において多くが出土している。16世紀代が中心で、下位の層からは16世紀前半、上位の層からは16世紀中頃～後半の遺物が出土している。僅かではあるが17～18世紀代の遺物も上位の層から確認された。このことから無常東下郭周辺は16世紀代、特に中頃から後半にかけて最も利用が盛んで、廃城になったのちにも人為的な動きが存在したと推定される。

空堀内では底面からの遺物は確認されなかった。白磁稜花皿？は空堀を埋めたことによる硬化面よりも上位に出土しており、埋めた時期が少なくとも16世紀代であったことを推測させる。いわゆる増山城跡が砺波地方において重要な位置を占めるのは16世紀中頃から17世紀にかけてであり、その間には神保、上杉、佐々、前田と城主が入れ替わり、戦がおこり、また普請もたびたび行われていたと思われる。大規模な造成はかなりの力が背景になければ不可能であろうから、空堀を埋めた時期については、佐々の頃であろうか。

増山城跡の造成時期及び造成段階については、今後さらに調査を推し進め様相を明らかにしたい。

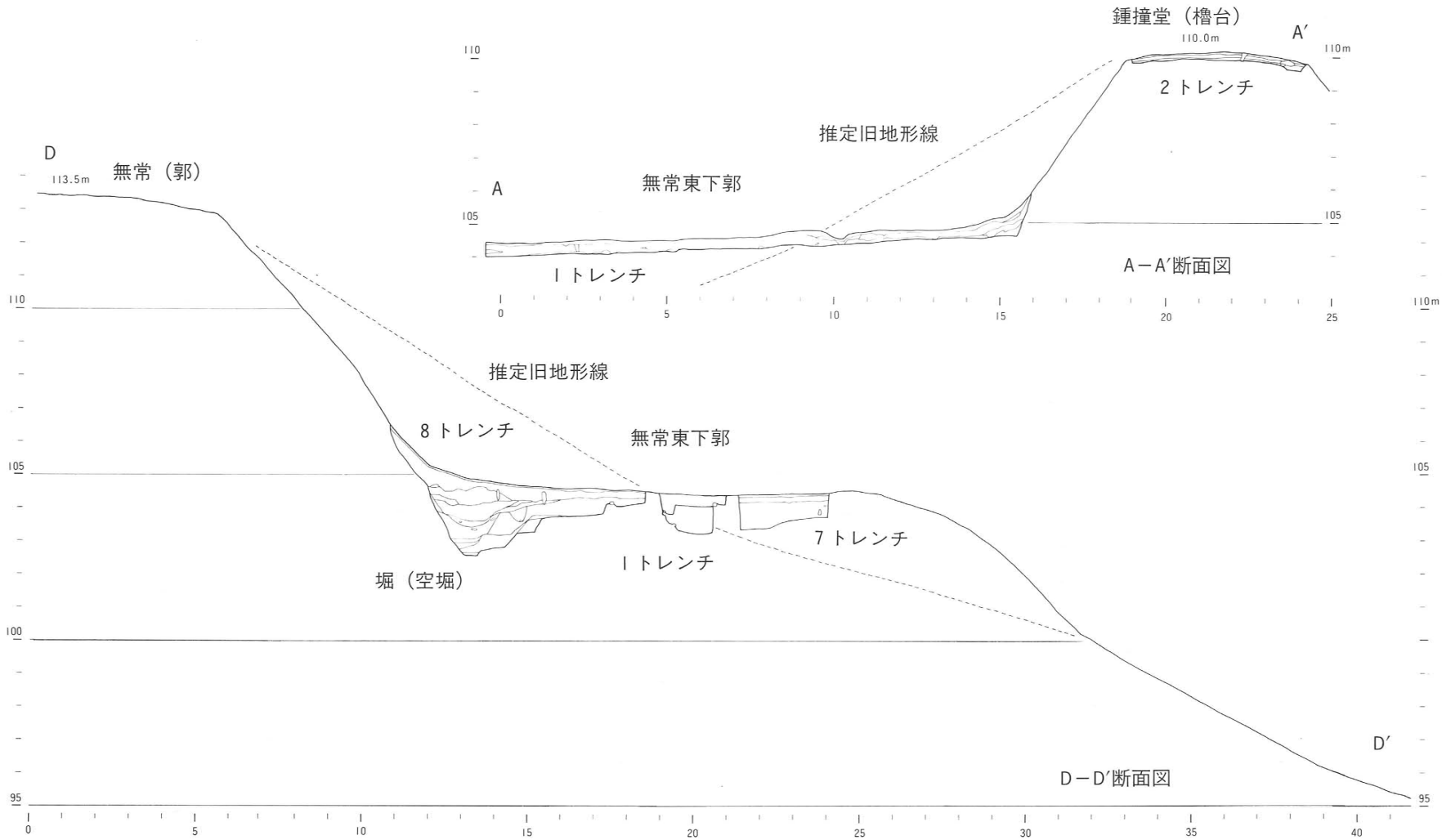
引用・参考文献

砺波市 1990 『砺波市史資料編 1 考古、古代・中世』

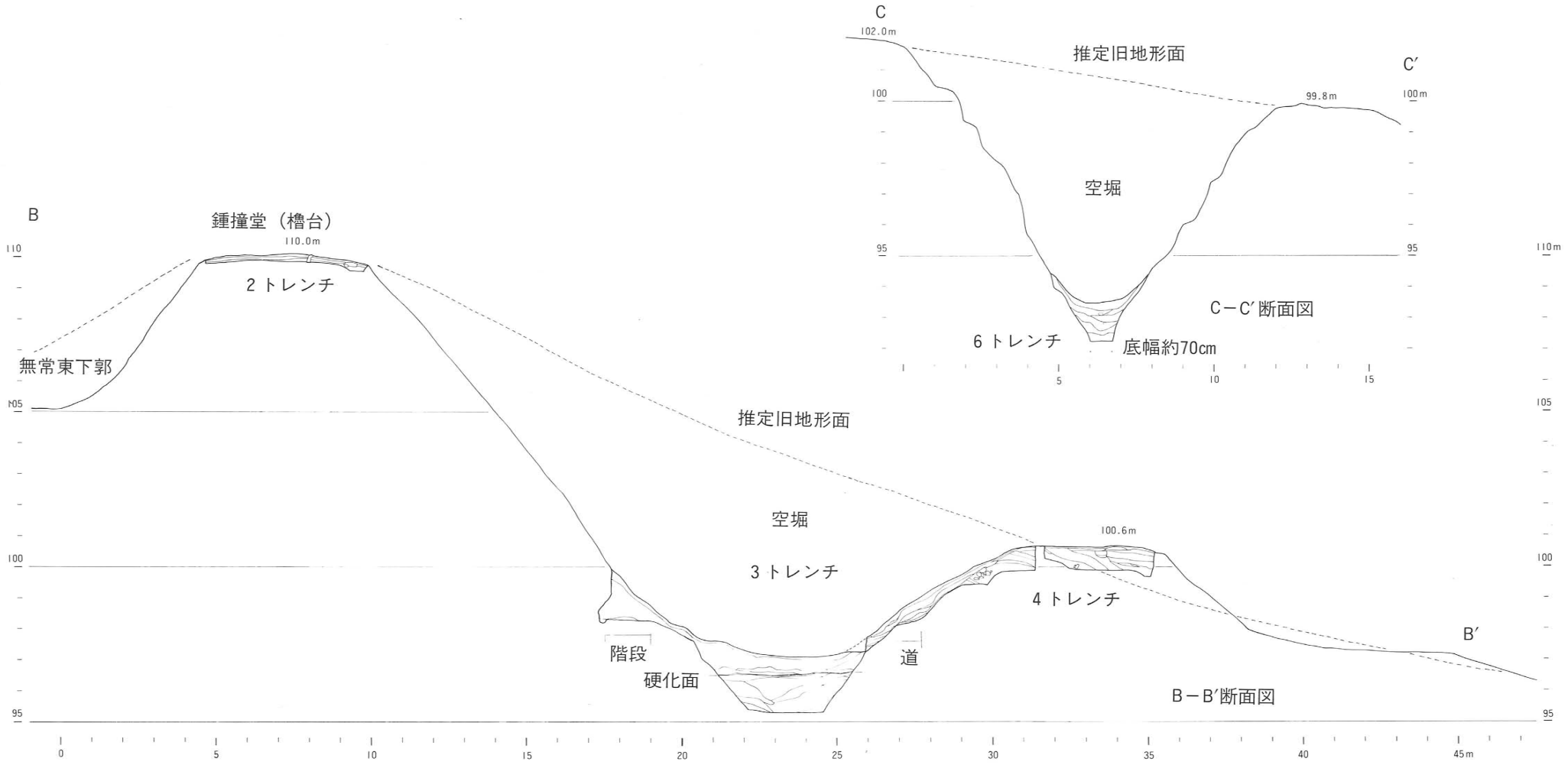
砺波市教育委員会 1978 『富山県砺波市梅檀野遺跡群予備調査概要』

砺波市教育委員会・砺波郷土資料館 1991 『増山城跡調査報告書』

北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』



第9図　無常東下郭断面図

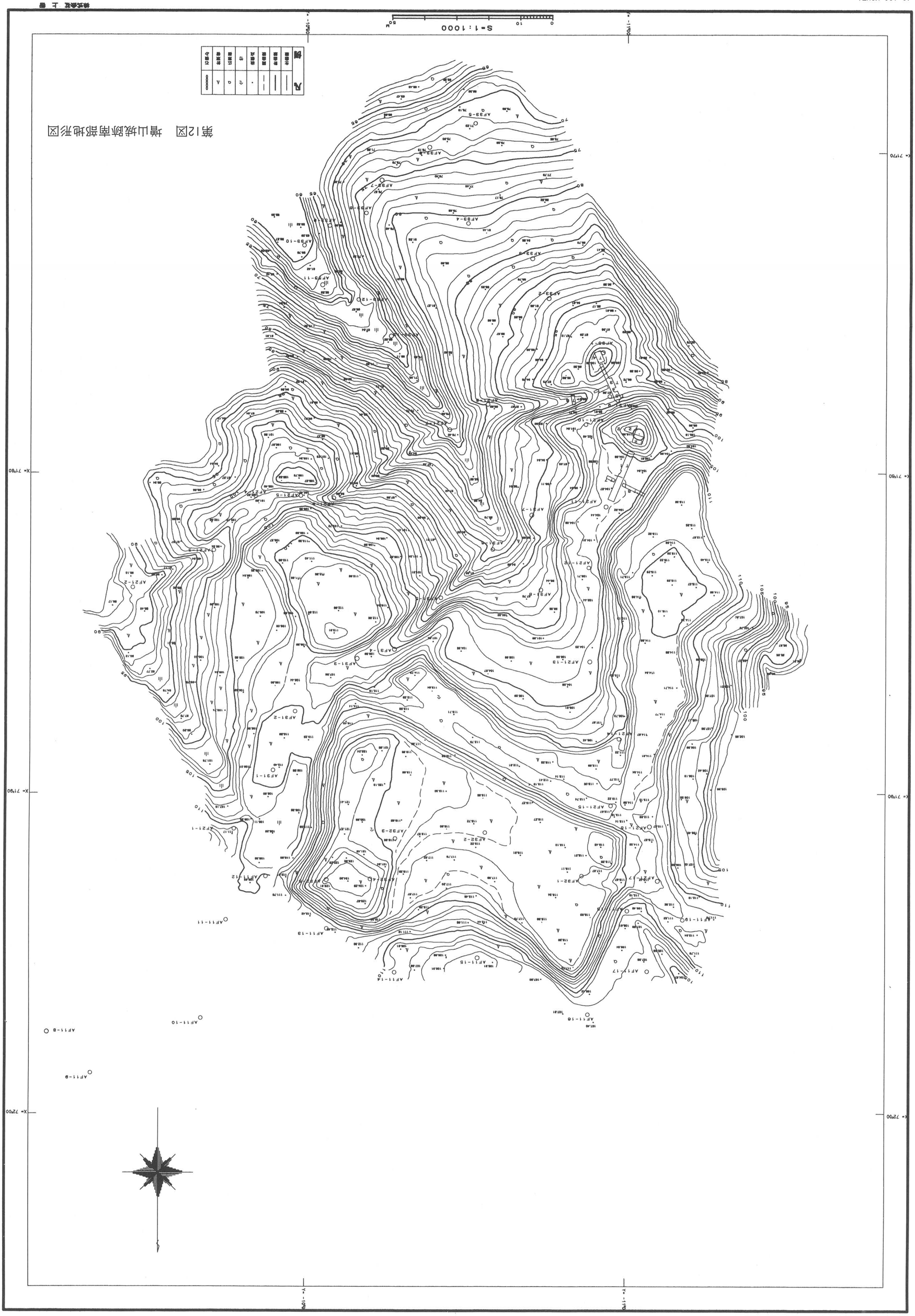

C
102.0m
推定旧地形面
C′
100
99.8m
100m
空堀
95
95
C－C′断面図
6 トレンチ
底幅約70cm
5
10
15
B
鍾撞堂（櫓台）
110.0m
110
2 トレンチ
無常東下郭
105
105
推定旧地形面
空堀
3 トレンチ
100.6m
4 トレンチ
100
100
B′
階段
硬化面
道
B－B′断面図
95
95
0
5
10
15
20
25
30
35
40
45m

第10図　空堀断面図

第11図　増山城跡南部縄張り図

株式会社　上　智

H-40-126-SEIKA2



第12図　増山城跡南部地形図

図版 1

1.無常東下郭（鐘撞堂より）

2.空堀（南櫓台より）

3.鐘撞堂平担面

1

2

3

4

図版 2

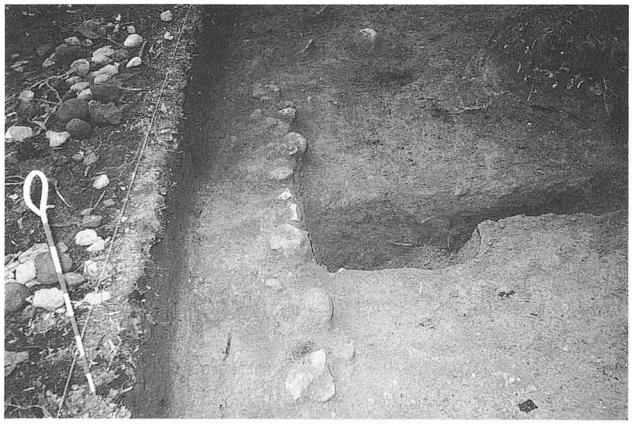
1. T 3 南櫓台斜面
2. 階段状遺構
3. 階段最上段、排水路（奥）
4. 道遠景
5. T 3 東壁断面
6. T 6 東壁断面

5

6

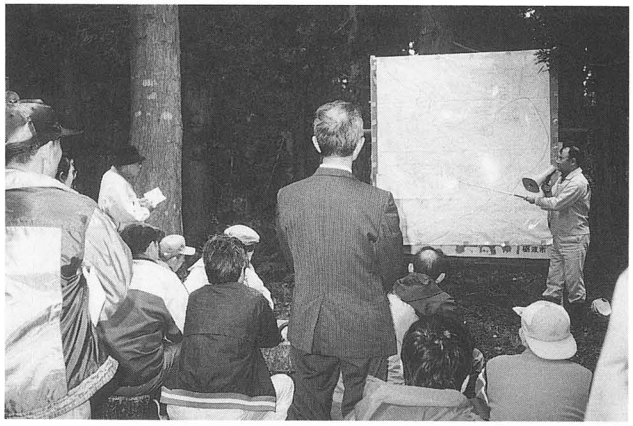
1

2



3

図版 3
1. T 8 堀底部
2. T 8 全景
3. 石列
4. 現地説明会風景
5. 現地説明風景
6. 発掘作業風景

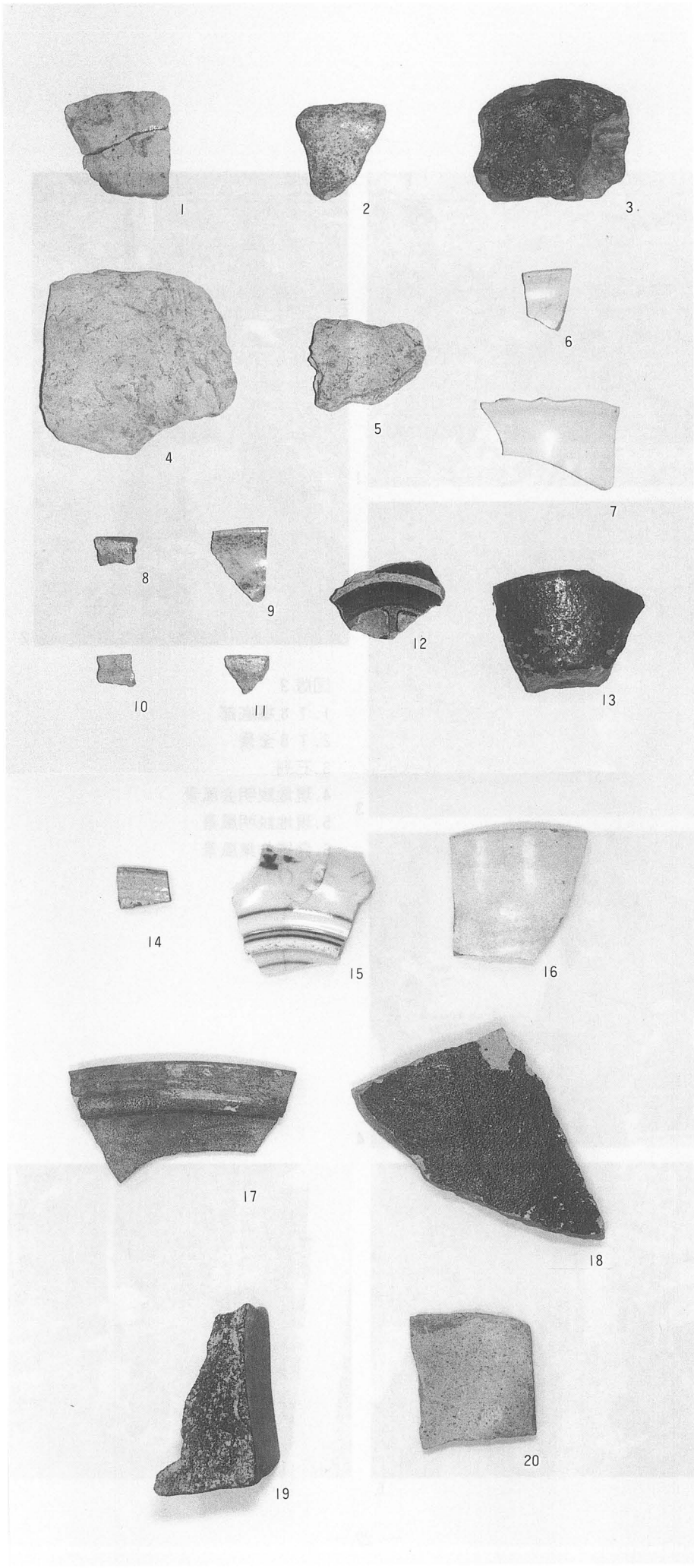


4

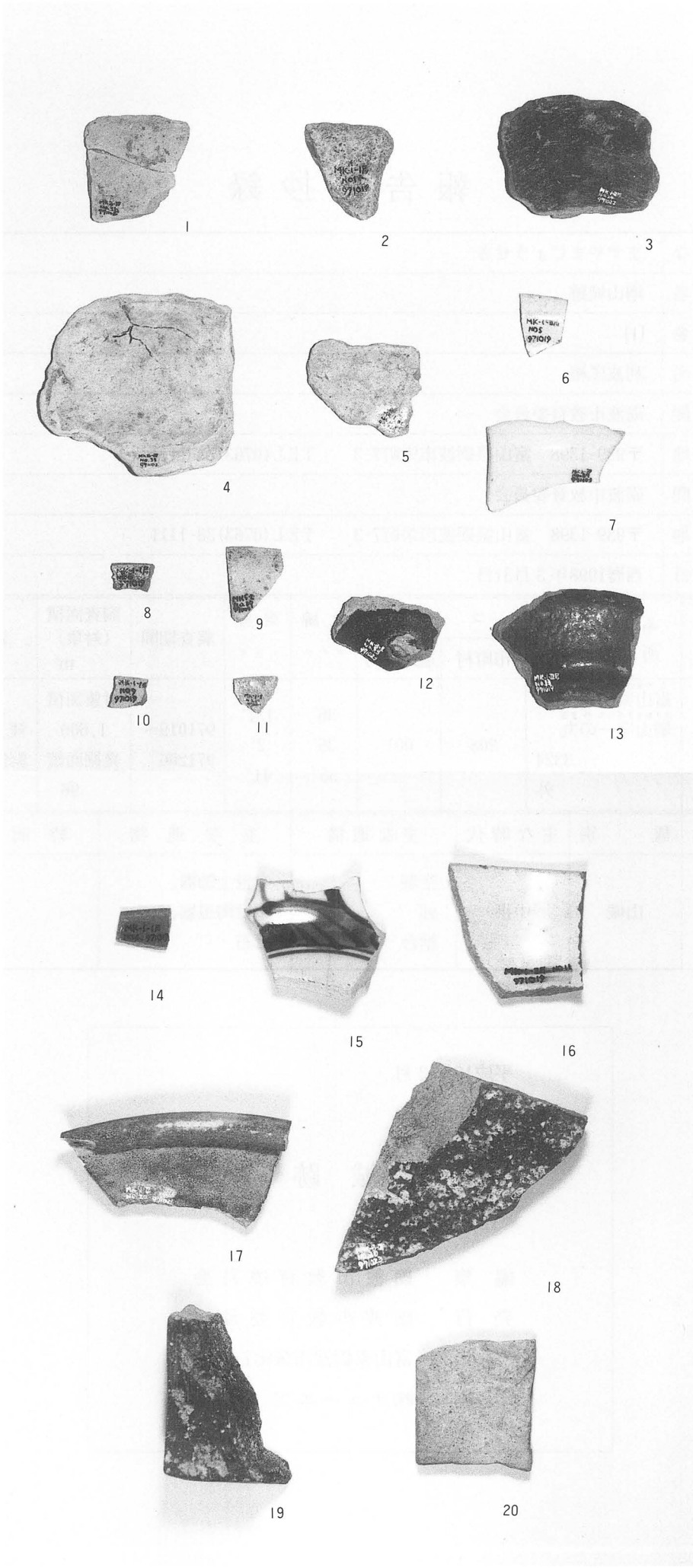
5

6

図版 4
出土遺物



図版 5
出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ますやまじょうせき
書名	増山城跡
シリーズ名	(1)
編集者名	利波匡裕
編集機関	砺波市教育委員会
所在地	〒939-1398　富山県砺波市栄町7-3　　TEL(0763)33-1111
発行機関	砺波市教育委員会
所在地	〒939-1398　富山県砺波市栄町7-3　　TEL(0763)33-1111
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (対象) ㎡	調査原因
ますやまじょうせき 増山城跡	とやまけんとなみし 富山県砺波市 ますやまあざいちのまる 増山字一の丸 3324 外	208	001	36° 39′ 55″	137° 2′ 41″	971019～ 971206	対象面積 1,600 発掘面積 96	埋蔵文化財 緊急調査事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
増山城跡	山城	中世	空堀 郭 櫓台	中世土師器、 中世陶磁器、 砥石	

平成10年3月

増山城跡 I

編集　砺波市教育委員会

発行　砺波市教育委員会

富山県砺波市栄町7-3

印刷　㈱チューエツ